第４回京都市未来共創チーム会議
議事録

日　時：令和６年１２月２３日（月）１３：００～１７：１０
会　場：学び場　とびら（オフィスワン四条烏丸１３階）

出席者：

安野　貴博	合同会社機械経営ＣＥＯ／ＡＩ　エンジニア／起業家／ＳＦ　作家
池坊　専宗	華道家・写真家
伊住　禮次朗	茶道総合資料館副館長
大井　葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹　莉瑚	市民公募委員
杉田　真理子	一般社団法人ｆｏｒ　Ｃｉｔｉｅｓ　共同代表／都市デザイナー
田口　成人	京都市職員（環境政策局）
都地　耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
仲田　匡志	株式会ＳＯＵ　代表取締役／Ｕ３５－ＫＹＯＴＯ　プロジェクトマネージャー
三川　夏代	株式会社メルカリ　『ｍｅｒｃａｒｉ　Ｒ４Ｄ』

以上１０名
（五十音順、敬称略）

１　開会

２　議事

（１）京都のめざすまちの姿等に関する議論

・これまでの議論の整理及び審議会への伝え方の検討

司会

まず、本日の議題の趣旨について、荒木室長からお願いする。

荒木都市経営戦略室長

本日の全体の議題を説明する。まず、資料１の次第をご覧いただきたい。

「（１）京都の目指す町の姿等に関する議論」で、これまで、第１回から第３回の未来共創チーム会議において、京都の価値観、強み、それらを損ねているものや、また、今後はそれらを踏まえて、京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらうまちにするために必要なことを議論していただいた。今回「これまでの議論の整理および審議会への伝え方の検討」を議題として、これまでの議論を整理するとともに、最終的なアウトプットと審議会への伝え方の２点を議論していただきたい。

なお、審議会は現在までに３回開催されており、第３回時点で骨子が議論されている。２月３日開催予定の第４回審議会で再度、骨子が議論されることになっており、その会議において、未来共創チーム会議のめざすまちの姿を、テキストベースで示していきたいと考えている。

司会

第３回会議後、個別に今後の進め方について意見聴取をさせていただいた。意見聴取の内容は大きく２つであり、自分たちが何を大事にしていくのか、何を伝えていきたいのかという部分と、どのように伝えていくのかの部分である。

意見聴取したそれぞれのグループから、審議会に対してだけではなく、市民に対してもうまく伝えていきたいという同じ論点の意見が出てきたが、市民に対してどう伝えていくのかという点については、別の機会に議論をする時間を設ける予定であるため、今回は、未来共創チーム会議が伝えたいことを、どのように審議会と共有するのかという論点に絞って本日の前半の議論を進めていく。

それを終えた後、自分たちが何を大事にしていくのか、何を伝えていきたいのかという議論の絞り込みに入っていきたい。

まずは審議会に対しての伝え方の議論の前に、個別に意見聴取させていただいた内容について共有する。前半のグループの議論内容は資料４－１に、後半のグループの議論内容は資料４－２となっており、後半のグループについては、仲田委員から説明いただく。

資料４－１、４－２に基づき資料説明

伊住委員

役割が明確に整理され、やるべきことが非常に分かりやすくなった。本日やるべきことがよりクリアになったのではないかと感じる。

三川委員

非常にきれいにまとまっており、今まで拡散していた未来共創チームの議論が収束していく感じがあり、本日話し合うことが、クリアになった印象だ。

これは、文書化する前に審議会委員にも伝え、文書化した後に、市民に伝えていくという意味で、２つの「どのように」を考えていくという感じか。

司会

そのとおりである。２つの「どのように」を考えるが、本日は審議会に向けて、どのように伝え、共有していくかという議論ができれば良いと考えている。今後の共創チーム会議の中で、市民にどう伝えていくかということを考える時間は別の機会に設ける予定である。

三川委員

理解した。では、文書化するためのサポートということか。

司会

文書化することもそうであるし、資料を渡して終わりではなく、文書以外の方法で、どのように伝えていくのか、どのような場の持ち方をするのかということを、議論していきたいと思う。

池坊委員

今回、審議会に向けて、最低限、書面やテキストの形に落とし込んだ方が良いという点は共通の理解だろうが、私は、市民の皆さんに対しても、審議会の皆さんに対しても、その道のりとしては繋がっていると思っており、殊更に、審議会に提出することを特別視することはないと思う。

テキストとしてまとめるとしても、結論をきちんとまとめたものにはしたくないと思う。それは、やはり審議会と未来共創チームメンバーの立ち位置や、発揮できる能力が違うこともある。京都にもいろいろな人が住んでいて、いろいろな悩みがあり、京都になじむことが難しい、大学がどうかなど、その一人一人の問いに一人一人の文脈があるだろう。だから、このようないろいろな疑問や問題点など、結論を明示したり、あるいは個人の文脈を排した形でテキストにしたりすることに、言葉の限界性を非常に感じた。最終的には、宣言やビジョンの形でまとまるが、私たちがその結論を言葉できちんとまとめることはやめたほうが良いと思う。そのような問題意識からも、問いを投げかけてみるなど、他のアプローチも考えられると思う。

その問いには個人の文脈があるように、私たちの存在を、きちんと審議会委員の皆さんや、

引いては市民の皆さんに受け止めてもらうこと、つまりここで自己完結するのではなく、投げかけがいるのかと思う。そういった意味で、結論が出ていなくても良いし、問いは１つのアプローチかなと思う。

都地委員

不格好でも良いと思う。この未来共創チームは、突き詰めていくと何なのかということを個人的にずっと考えてみたが、割と統合や一体化をしていくという要素が非常に強いと思う。この未来共創チーム会議で集まっている人たちのそれぞれの経験や知識があって、それぞれの言葉で表現されていると思うが、そのような思いは、審議会だけでなく、市民の方々にもそれぞれあると思う。

私としては、何かしら文章として表現するにしても、このような資料があって、個々が表現できる京都を、空白で自由に記載することができるような機会があっても良いのではないかと思う。

大竹委員

「個々」とは、委員それぞれがということか。

都地委員

共創チーム会議メンバーや審議会の方だけでもなく、それこそ０．１で関わっているような人や京都市民の方でも、全ての方々が対象になると思う。誰しもが京都で生きてきて、そして、京都を対象にして考えてきたその結果、「あなたは京都をどう見るのか」といったところや、各々の様々な京都という複数解があるので、その複数解を表現できるような形になっても良いのかと思う。

大竹委員

それに近いところだが、これまでは、構想だけではなく、みんなが目指す１つの何かがあって、それに全員が同意して、そこに向かっていったらうまくいくというような世界観であった気がする。

例えば、政治なども、同じ方向に向かって、みんなで歩いていけばうまくいくというようなこと。しかしながら、果たしてそうなのかと思う節があり、今までの議論にも出てきたが、集団は個の集まりであり、すごくバラエティーがあるということを、再度自分たちも認識する必要がある。みんなを包括できるような、１つの理想的な解を導き出すことが難しいだろうという話にもなり、問いや、何か違うアプローチで形にしていきたいという話になっていった。

しかし、そもそも、その２５年後は全然分からないものであり、想像の域を超えないのではないか。それに向かって、この基本構想を基に、様々な政策が進められていくとなると難しい。基本構想が全てではないこと、そもそも全てまとめ切れるはずがないというようなことは、私の中では非常に感じている。

私たちの議論で出てきた「ベストではなくてベターを」というようなことは、未完だからこそ、運用していきながらつくり変えることができ、解釈し直していける。従って、完璧なものをつくり上げて提出する形ではなく、もっと議論や、市民が考え、私たちや審議会委員も市民だが、皆さんが考えて、付け足して、解釈して、アウトプットを繰り返していくことができるようなものを残しておきたいという感覚があるという話をしていた。

伊住委員

先ほど池坊委員の話にあった「言葉の限界」は絶対にあり、後世の人たちが、何年前に作られたこの宣言に基づいて、この文章がこう書いてあるから、これに対して、その目的に向かう、という強い求心力を言葉は持っているが、逆に言うと、それ以外の可能性を、ともすれば排除してしまうようなことにもなりかねないので、その宣言の中に、そういった余白のようなものは、多少なりとも必要だと思う。

従って、それが、何かアクションを伴うプランなのか分からないが、文章にするということは、今回のメイントピックで非常に重要なことだとして、未来共創チームとして、それ以外の部分での何か柔らかい可能性のようなものを、どうやったら残せるのか、表現できるのかということは、考える余地があると思う。

杉田委員

私も個人の視点というところが非常に大切だと思う。『大正時代のお悩み相談』という本があり、これは大正時代の新聞の「市民からのお悩みコーナー」のようなものが本になっているもので、それに対する新聞記者の回答が書いてあるが、恋愛編・仕事編・暮らし編・家族編という感じで様々な章があり、１つ１つは、たわいもない本当に個々の日々のパーソナルな悩みが書かれており、そこから大正という時代が浮かび上がってくることの面白さと、意外と現代と違わず、同じように悩んでいるようなところを見ると、ささいなパーソナルなストーリーから、あるべき姿というか、大きな問いのようなものが分かってきたところがあった。そういったアプローチが何かできないかということをもやもやと考えながらこの場所に来た。

きれいにまとまったリポートを作るわけではないということは、現在、何となく未来共創チームの総意としてあると思うが、どちらかというとインデックスというか、個別のものがあり、でも、それを引き出しやすいような、例えば恋愛編・仕事編のような、２５年後だけではなく、もしかするともっと先で、２０２４年にこのぐらいの年齢の人が、このようなことを考えて、このようなことを悩んでいたのだということが分かるような何かを残してみたいという気はする。

池坊委員

昔は、歴史なども、いろいろなビッグヒストリーを語るなどという著作が多かったが、それがオーラルヒストリーの１人の語りをまとめていくことで、時代を描く、あるいはヨーロッパでも、農民の一人一人の、名もなき人のスモールストーリーをまとめていき、歴史を分

析していく流れが生まれるなど、やはり大きなひとくくりで捉えられる時代ではないと思う。
　この未来共創チーム会議でも、ひたすら顔を突き合わせて熟議したというところが魅力の１つでもあるので、そのようなスモールヒストリーを合わせてできた京都や多層な京都が重なっていくというようなものが体現できるといいと思う。

伊住委員
　何か万葉集という感じ。

三川委員
　非常に面白いと思う。杉田委員の話を聞き、私も１冊思い出した本がある。『東京の生活史』という本で、東京に住んでいる１５０人が、素人を相手に語るというもので、普通のインタビューは、インタビュアーとインタビュイーがいて、編集されたものがアウトプットされて紙面に載ると思うが、この『東京の生活史』は、あえて聞き手の人は、語り手が語った言葉を抄訳や編集せずに、そのまま書き取るというものである。
　それが１５０人分あって、非常に分厚い本だが、生の声である。編集されていない分、読み手の読解力や想像力や、あるいは見立てのようなところが問われるが、受け手にとっての考えられる余白がある状態が非常に面白いところであり、先ほどの杉田委員の話にも近いと思う。あえて編集せず、格好よく見せずに、そのまま生のものを届けることによって、受け手の想像力を私たちが信頼して任せてみることも、非常に良いと思った。

安野委員
　前提条件を整理したい。資料４－２の５ページ目に「未来共創チームに審議会召喚」とはあるが、プロセスとしてはどのようになるのか。また、第４．５回、第５回の内容や実施自体は決定しているものなのか、もしくは、後半のグループ内での話し合いのまとめなのか、位置付け的にはどちらだったか。

大竹委員
　後半のグループ内での話し合いの中で出た案のレベルである。

安野委員
　２月に第４回の審議会があり、そこまでに何か審議会に意見や思いを届けたいということは、ほぼ決定している話か。

杉田委員
　そのとおりである。

安野委員
　その点で言うと、審議会の方に何かを渡した時に、どのようなことまで出来得るのかとい

うことを聞きたい。例えば、本１冊分の情報量が渡されて、審議会の人が読み切った上でそれが反映されることは可能なのか、どこまでの情報が伝えられるのだろうという現実的な制約条件を一応知っておきたい。

司会

分厚い本を１冊読んでいただくことは、なかなか難しいものがあるかもしれない。また、そのようなドキュメントを作ることも難しいかもしれないため、この会議の温度感と、きれいにならない言葉を、どのように、審議会にライブに伝えることができるかということを、まず優先したほうが良いという気がしている。

三川委員

私からも似たような質問で、現在、審議会と未来共創チーム会議でギャップがあるという話だと思うが、どれくらいのギャップがあるのかというところや、私たちの今までの議論が、どれぐらい伝わっていそうなのかというところをもう少し聞きたい。

大竹委員

それだけではなく、草案を作成する野村特別委員にもどのくらい伝わっているのか聞きたい。

司会

野村特別委員が作成した草案の骨子が出てきているので、そこで少し感じ取れるものはある。

安野委員

審議会の方や野村特別委員は、未来共創チーム会議の議事録を見ているのか。

司会

手元に渡ってはいる。第２回が合同会議であり、リアルに言葉が伝えられたあの場のみで、あとは書類だけでしか伝わっていない状況だ。

安野委員

そういった意味で言うと、私は資料４－１に記載がある、アクションが伴っていることを考えたいという方針に賛成だ。理由としては、まとめ方としても、いろいろあり得るということも面白いと思うし、対市民は置いておいて、より重要なのは、対審議会に対して、審議会委員が読んだ上で、あるいは何かを聞いた上で、「こう思っていたけれども、こうだな」という何らかのアクションが生まれると良いと思った。それが、未来共創チーム会議の存在意義であると思うため、どのようなアクションが生めるのかということは、すごく考えたい。

その上で、結論を渡すのではなく、論点を渡すというやり方は１つあると思う。

杉田委員

前半のグループでは、具体例のようなものは出たのか。

伊住委員

それこそ、以前、杉田委員が話していたと思うが、このメンバーだからできることで伝えていくというのも１つの在り方として考えた際に、何となく具体的なイメージとして湧いたのは、１つのお茶会のような形にして、審議会の人にも入ってもらって、そこで対座しながら、きちんと論点を説明する時間を設けられたら、ただ資料を渡すよりは、よりディープに伝えていけるものもあるのではないかという話をしていた。

安野委員

非常に良いと思う。第５回の未来共創チーム会議に審議会召喚の回があるが、そこでやっていただいて、何かビデオのようなものが記録として残るのであれば、実は京都市の歴史としても、非常に意味があるかもしれない。どういった問答が、どういう表情で、誰と誰の間で行われたのかというようなことが、その動画として残るというのは一個のやり方かもしれない。対市民に対する打ち出し方としても、その動画の切り抜きなどが見られるようなやり方もあると思うし、面白いアイデアだと思う。

伊住委員

私の話ではお茶会で何か１つの論点を伝えるものだったが、それ以外にフェスの形にするというアイデアは出ていたと思う。

田口委員

私は例えばフェスなどでも良いのではないかという話をした。最近読んでいる本で、「テキストは啓蒙には適しているが共感には適していない」という話があった。また、別の歴史学の本を読んでいて、歴史学は、法律の用語は一定のルールで書かれているため勉強すれば読めるようになるという話が書いてあり、一方で、昔の御成敗式目か何かは、誰でも分かるような当時の日常の言葉で書いているが故に、時代を経ると逆に解釈が難しいという話であった。

先ほどの『東京の生活史』の社会学のような話と、今回の長期ビジョンの文章には、「日常の言葉」と「啓蒙の言葉」という質の違いがあるのだと思うが、私は両方大事であると思う。

審議会の議事録を見ていると、啓蒙の言葉の話だけをしている印象があり、未来共創チームとしては、日常の言葉の重要性のようなことを打ち出していかなくてはいけないと思う。また、日常の言葉はテキストである必然性がないということだと思うので、もしかしたら、先ほど出たようなお茶会などでしか表現できないことがあるかもしれないし具体的な動きを起こしていくためのエッセンスのようなものを、どのようにして伝えられるのかということを先ほど考えていた。

仲田委員

ここまでを少し整理すると、第４回までに形式として届けるテキスト、万葉集的な問いなど個々一人一人のヒストリーを紡いだ意見として出しつつ、先ほど話があったフェスやお茶などの体験として、すなわちテキストだけでは伝わらないものを消化して届けるという、この２つが大事ではないか。骨子への意見も大事であるが、それ以前に、こうしたことをセットにした骨子であってほしいということも俯瞰できたら、伝えたいことが伝わるのかと思う。

伝えたいことは同じ内容だが伝え方が違い、共創チームとして、その両方が大事だと気付いたということではないか。

大井委員

例えば、意識の高い方は、文字だとしても、体験だったとしても見るし、考えると思うが、そうではない方々や審議会の方々は、時間の制約がある中で、それこそ文字上だけでは伝え切れないと思う。だからこそ、体験の話などをしていたのも、やはり誰かしらに刺さる興味や、先ほどの杉田委員の話であった、たわいもない感じのようなところは、日々、生きている中での大事なことだと思うので、そういったところに刺さる何かがあれば良いと思う。

安野委員

万葉集関連の参考になるか分からないが、現在、東京都のアドバイザーとしても活動する中で、東京都ではこれに近いものとして、ＳＮＳ上で、未来の東京はこうなってほしいということを誰でも良いので投稿してもらい、東京都のエンジニアチームがウェブ上からデータを集め、なるべくＡＩを使って自動的に整理していくということを行っている。特定の１０人や２０人だけではなく、１万人以上の方のそのような思いや声を聞くことにトライしている部分が先ほどの話と通じる部分があり、万葉集的な部分もあり面白いと感じた。

杉田委員

それは非常に面白いと思う。テキストという時に、ずっと変わらない、紙に書かれたもののイメージが私たちの中にあると思うが、先ほどの安野委員の東京都の話は、所謂、可変性のあるデータや、更新やバージョンアップされるもののような考え方ではないか。

安野委員

そのとおりである。

杉田委員

ＭＩＴメディアラボの都市の部署でＰｈＤをしていた研究者の酒井氏と話をした時に、都市を考える上でのバージョン性のような話をしていた。都市は、既にインフラがあり、人がいて、ゼロからつくるものではなく、毎回バージョンを重ねたり、非常に大きなイノベーションがあったとしても、元のものを転用させたり、足し算や引き算したりしていくという考え方が、コーディングしている方はピンとくると思うが、非常にＧｉｔＨｕｂ的で、レポジ

トリ的に都市のアイデアを考える必要があるという話をしていた。
すなわち、アイデアバンク的な貯蔵庫という意味でのレポジトリであり、それは誰でもアクセスできる貯蔵庫として、例えば１０年前に、ある人が考えていたものを、みんながそこから勝手に取って、付け加えたり、改編してもう１回入れたりということができる世界観である。
「１０年前に、こういう人がこういうことを考えて、こういうことをした」ということを前提に、「では、私たちはそれをバージョンアップさせるためにどうするのか」ということを考える際、テキストを静的なものと捉えるのではなく、例えばすごく可変性のある、それこそデジタル上にテキストを残していき、それを、バージョンアップをさせていったり、誰かがコピーをして、それを使っても良いと捉える。まさに先ほど話していたように、空白部分があって誰かが書き込めるというところも、このレポジトリの話に非常に近いと思う。

都地委員
課題などのいろいろなものをリアルタイムで追加できる、逆に言えば良さを感じられるようなものがある。例えば、２０２４年の時点では選ばれなかったことでも、例えば２０３０年の時には、２０２４年の時に出てきたこの案が、実は今の時代に適しているのではないかというようなこともあるのではないか。
現在で言うと、例えば地下鉄は延伸することが難しい。だからこそ、例えば路面電車など昔あったものをもう一度戻すのも良いのではないかなど、これはあくまで例であるが、そのような物の見方もでき、レポジトリの強みはそこだと思う。
変にコーディングをいじり、汚い何かスパゲティコードのような状態になったとしても、もう１回戻り、きれいな状態に戻すこともできる。つまり、昔提案されたことで、現代で選ばれなかったものも、その未来はどうなのか分からない。

杉田委員
路面電車の例なども、まさにと思って聞いていたが、今の時代にこそ路面電車があっても良いのではないかという話をしている人も周りにいる。その時は時代遅れのような感じで廃止になってしまったものが、２０２４年になって、もう１回そこのレポジトリに戻っていった時に、「実はこのアイデアは使えたかもしれない。もう１回引き出してきて、もう１回ブラッシュアップしてみよう」ということができるかもしれないと考えた時に、ここで議論されたものがレポジトリ的にあって、バージョンアップや可変ができる状態。

都地委員
かつ、今の時代で言うと、選び切ってしまうところは非常にもったいないと思う。選ばれなくなってから、ある程度時間が経っていった時に、元々形式知として存在していたものが、完全に暗黙知化してしまい、その匠と呼ばれるような人たちの知見も全部損なわれていくとなると、非常にもったいない話だと思うので、やはりレポジトリとして残していくことは、大賛成。

田口委員

以前、池坊委員だったかと思うが、京都は参照点がたくさん取れると話があったと思い、先ほどの話はまさに同じような話だと思い聞いていた。

理念的な話も当然重要だが、それを実際に、現実に実装するためにはどうしたら良いのだろうかというところの、イメージがまだ湧いていない。常にビジョンや手法がアップデートされていくやり方は、プログラミングの世界などであれば、実装されていると思うが、それを都市で行うためにはどういったことだろうということも考えたいと思う。

杉田委員

他の行政とのディスカッションの際にアイデアとして出たものだが、例えばＮｏｔｉｏｎや、Ｄｏｃｓなど、みんながアクセスでき、ある程度のメンバーで誰かがアップデートができるものをプラットフォームとして持っておき、そこに、きれいではないままのインデックス的なデータを載せていくことを考えていたプロジェクトがあった。

例えばそこに、Ｎｏｔｉｏｎであればタグなども付けることができ、環境や、コミュニティー、ケアや子育てなど、それぞれのカテゴリーごとに、本日の議論で出てきたようなキーワードや、参考にしたレファレンス、それこそきれいにしない状態のプロセスの言葉やパーソナルな視点などが、ローデータ的に残り、溜まっていく。議事録にも近いのかもしれないが、それを誰でも見ることができる、可変性があり、後世に残るもののイメージ。

都地委員

情報としても、選択した結果と、あとは選択した時の基準が、やはり一般的に公開される必要はあるかと思う。例えば都市開発においても、「この土地を区画整理する。それは大体５，０００平方メートル」などという情報は、要らないと思う。このエリアはこのような課題があって、それを解決するために、この選択をしたといったところを、いろいろな人たちが関わってきた意思のようなところが参照できるようになったら良いと思う。

やはり今の時代は昔の時代とは違い、いろいろなデータを集めやすいと思う。それこそ、先ほどの東京の話と少し近いのかもしれないが、公式のように決まった文章ではなく、そのようなものを置いて、本当にいろいろな人たちがそこに、代数のようにビジョンを入れていくなどすると、いろいろな意見をデータとして集めていくことができる。採用されるかどうかはともかく、書いた人たちは、どういった視点でこの町を見ているのかなど、いろいろ見ることはできると思う。今までＮｕｌｌだったところに、ようやく意味を持たせることができると思う。

杉田委員

京都市で、理想京のプラットフォーム（ｉｄｅａｌ　Ｋｙｏｔｏ）が今年立ち上がったことは、考えるべきことかと思う。そのサイトも市民の方が誰でも書き込みができるようになっている。悩み事や、大事にしたこと、惜しいことなどが、掲示板のような感じに投稿され、コメントもできたり、「いいね」が付けられたり、ＳＮＳのようになっているが、今らしい

アイデアだと思う。

池坊委員

長期ビジョンなどのためだけに存在しているのはもったいない。現在、若干陳情のようになっているが、あれがＡＩやグラフィックスを絡めて、流動的に動くような仕掛けにして、それが入力だが、もちろん参照もできるし、他の人のコメントにも関わって、タッチして、長期間で、２５年間の出力としての役割もあれば、面白いかなと思う。

司会

現時点ではプロトタイプのものかもしれないし、これが５年、１０年、もし続いていたとしたら、レポジトリのベースになるかもしれないという気がしている。

池坊委員

そのとおりである。ただ、レイアウトが少し堅い。

落合陽一氏とたまに会うが、落合氏が謎のグラフィックの映像などをよく作られていて、ＡＩも絡まっていると思うが、蝶が石に戻って、そこからいろいろな蝶が羽ばたいたり、謎の映像だったり、そういった立て付けであれば、一緒に溶け込んで何か影響を与えて、自律的に応答しながら発展している感じがする。そのようなものになると面白いと思う。

伊住委員

ソニーコンピュータサイエンス研究所が、プロジェクトとしてウィキペディアのまちづくりバージョンのようなものを、四条烏丸の辺りに京都研究室を置いてつくっている。その研究員の竹内雄一郎氏という方が、ウィキトピアというプロジェクトを進めており、それはまちづくりの様々な要望などをみんなで可変性を持ちながら編集していくという仕組みだったように記憶している。

１つ、そういったプロジェクトが京都の中で研究として行われているので、そのような部分と何かジョインできる可能性があるのであれば、今回の１つのプロトタイプのようなものかもしれないが、理想京のサイトとは別に、そういったところで、何か今回のプロジェクトとつなげられる可能性があるのであれば、面白いかもしれない。

安野委員

全く同意で、継続的な取り組みに進化させることが、１つ大事なことだと思う。今までの未来ビジョン策定は、２５年に１回や４年に１回作って、そのとおりにやって、４年に１回、何とかうまくできているかのチェックポイントを設けるような感じだったと思うが、むしろ、これだけ速くいろいろなことが動いている現代においては、連続的に、少しずつ見直しが起きるような構造にシフトしていくことが、１つのやり方の大きな変化だと思うので、そういったものをつくっても良いのではないかと思う。

都地委員

ウォーターフォールではなく。

安野委員

まさにそのとおりである。昔、ソフトウエアも、１年に１回しかバージョンアップしないというやり方で開発していたが、今は、いろいろなサイトを見ても分かるとおり、１日に何十回もバージョンアップするように変わってきている。同じことは、まちづくりにも言えるかもしれない。

大竹委員

先ほどの話の中で、自分なりに理解した範囲で思ったことは、紙の場合、読み方が一通りしかないということである。1 ページ目から順に読んでいくが、例えば本全体を読むときと、1 ページ目と最後のページを比べたときの情報の受け取り方には差があると思う。

本の場合、目次の存在意義は、自分の興味のあるページや好きなページに飛ぶことができる点にあると思う。文章の限界としては、読み方がある程度決められてしまい、完成形でしか情報が得られず、整えられた内容しか受け取れないということが挙げられる。

しかし、レポジトリの場合、先ほどの話にもあったように、完成品だけでなく、なぜそのような成果物ができたのかという思考のプロセスも遡って確認することができる。例えば、みんなでつくる構想が少し変わった場合でも、それまでの思考の蓄積に立ち返ることができる。

また、文字には不可逆性があまりないと感じる。何度も読み返すことはできるが、やはり一通りの読み方しかできない。電子やその他のツールであれば、読みたい部分だけを読むこともできるため、その点は利便性が高いと思う。ただし、年配の方や電子機器に慣れていない方々についてどうするのかという問題もある。アクセス可能なツールだからといって、全員がアクセスできるわけではない。Notion などのツールを使える人もいるが、使えない人もいる。そのため、ツールを選ぶことは、結果としてそれにアクセスできる市民を選別することになるのではないかと感じる。この点から、紙の重要性も理解できるが、紙の場合は編集されたまとまった情報しか得られないため、難しさもある。

田口委員

私もその点は非常に重要であると毎回思っていた。伝えるべきことをどう伝えるかということを、いつも別々に分けて議論しているように思うが、基本的に、形式が伝えるものも否定してしまうため、逆に活字にすることで、テキストはアーカイブ性があるなど、そこで固着され、さかのぼれるという特性もある。一方、ウェブだと、もはやどれが最新か分からないという話もあると思う。形式と伝える内容は、本来的には、１つのものだと考えた上で、それをきちんと切り分けてやろうという両方の議論をしなくてはいけないということを、大竹委員の指摘で思った。

安野委員

そのスタイルとコンテンツの分離の話もそうだが、その伝え方の中のフォーマットにおいても、例えば紙に書かれたものを伝えるのか、大量のデータで伝えるのか、あるいは会ってイベントとしてやるのか、それとも動画で撮ってやるのかは、それぞれの媒体において、取り残される人と取り残されない人がいる。

従って、１つ大事なのは、それを認識した上で、いろいろな媒体を組み合わせて使った方が、より良いのではないかということだ。

そういった意味で言うと、先ほど出ていた案で、万葉集＋イベントのような話は、万葉集部分がおそらくデータとテキストという部分だと思い、イベントが実地での交流と、あるいはそれが動画として残るかもしれないため、データ部分をどうするかはまだ見えていないが、私は、実行可能な中では、いろいろな媒体をミックスできていて、バランスは悪くないのではないかと思う。

大井委員

今は、審議会に対しての議論だと思うが、そのミックスされるというのは、審議会と、市民に向けてというのは異なるイメージか。

安野委員

微妙に重なるイメージだと思う。これは私の勝手な想像だが、イベントなどの実地で未来共創チーム委員と審議会委員が話す会と、別途テキストが渡される。従って、審議会委員からしてみると、２つの種類の情報が来る。そのアーカイブが対市民に公開されるようなイメージをしていたため、市民に対しては動画とテキストが渡されるようなイメージかと思っていた。

伊住委員

その点で一番届く方法で言うと、やはりオールドメディアだと思う。新聞、テレビ、ラジオ、雑誌で言うと、例えばこういった京都市の取り組みの場合、地元の新聞に取り上げてもらう努力をするなど、その辺りはできる範囲の話だと思う。なるべく多くの人に、このようなことをやっているということを、とりあえず届けることから始めるのであれば、新聞やテレビ等の取材に来てもらうような努力はそれなりに必要かと思う。

都地委員

回覧板なども使える。

杉田委員

まさに、どのメディアを取ったとしても、誰かしらはレフトアウトされるというところでいくと、その可変性はあり得ることで、目的に合わせて、例えばこの場合はイベントをする、この場合はビデオにするというところは必要になってくる所作かと思う。

今、日本国憲法の勉強をしているが、先日、「日本国憲法　大阪おばちゃん語版」をゲットした。その前に、日本国憲法のアート本のようなもので、１つの文章に絵なり写真なりがあり、絵本のような感じで一章一章が理解できるようなものを買っていた。

同じ話をしていても、この場合は、関西弁に訳してあげなければいけないし、この場合は、よりクリエイティブな人向けに少しビジュアルを加えなければいけない、ということ。今、「では、イベントにしよう、テキストにしよう」という議論よりは、日本国憲法を作ろうという議論なのだと思う。

司会

審議会に対しては、万葉集的なテキスト部分と、本当は体験で、壮大なお茶会などを開けると良いかもしれないということ。

この１０人のメンバーの個人固有の思いをぶつけていくやり方もあり、問いに置き換えて、その問いの中で何を感じるかという対話の場を設けるという方法が出てきた。

三川委員

そもそもの問題提起として、現在、審議会でつくられている構想と、私たちもしくは市民側とのギャップが生じているという仮定で進んでいると思うが、もしそうなのであれば、そもそもギャップに気付いてもらうところが非常に大事なのかと思う。

もう１個は、とはいえ、実現可能性などを考えると、ある程度、施策としては限られてくるという議論があったと思う。つまり、既にあるリソースをどう使うのかという視点も大事だと思う。私たちがやることの１つとして、審議会委員の方々に、実際に市民ないし私たちの声を直接伝えることによって、ギャップに気付いてもらうというアクションもありなのかと思う。

例えば、毎月第３金曜日に、京都市役所の前で、「小さな芝生広場の実験」と題していろいろイベントなどをしていると思うが、あの場は、京都市職員の皆さんの取り組みの影響もあり、多くの人が集まっている場所だと思う。

具体的な提案になってしまうが、そこに私たちが出向いて、市民と審議会をつなぐコーディネーターとして入って、市民の声を直接審議会の皆さんに届けて、ギャップに気付いてもらい、私たちも私たちの思いをそこで届けながら、市民・審議会・私たちが一体になる場をつくっていくことも、１つありかなと思った。

仲田委員

ここまでのまとめであるが、市民の方のアイデア、思考が貯蔵されて、時代に応じて編集ができる、不易流行な方法を提案したいということだった。その背景としては、選ばれた未来共創チームのメンバーは私たちだが、京都市民を含めて多様で重層的であり、私たちの意見だけでは足りないのではないかということである。

ここだけで若者の意見とはならず、他にもいろいろと届けたいというのが、先ほどの三川委員のギャップというところも含めてかと私は思う。

議論の中で出てきた具体的な手法として、一人一人の意見から浮かび上がってきた京都を、インデックス付きの貯蔵庫に入れてみて、次の第４回審議会までに、何らかの形で出していく。それがテキスト的なものもあれば、体験的なものもある。

池坊委員

取りあえず今回は、市民の意見を網羅して収集することは切り離しても良いのではないかと思う。当然、私たちも市民に対する代表性はない。あると言うと、それは傲慢なスタンスかと思う。逆に、代表を無理やり擬製する必要がないというか、当然私たちも京都の一員であるわけだから、それを１つに集約できるわけではない。

それゆえ、今回については、共創メンバーの一人一人の解像度の高い提案をすることが重要かと思う。無理に市民の意見を急に集めると、これまでの資料でもあったが、アンケート調になるというか、いろいろな情報のディテールが切り捨てられていくので、それを切り捨てず、一人一人の解像感を伴った形でまとめて、それをぶつけていくほうが建設的ではないかと思う。

司会

まずはそういった形が良いかと思うが、限られた時間の中でできる、一番情報量が多く、外部に伝えられる方法を、次回審議会との対話の場で使うということでどうか。それは、おそらく一個人の思いを伝えていくことになり、この後選ぶ、何を大事にしていくのかということを、自分なりの問いの言葉に置き換えるという１つの作法が、暫定的には考えられると思う。

それをベースのやり方にしてみて、ブラッシュアップできる部分はあると思うが、その辺は今後議論したい。

では、第１議題目を終わり、少し休憩とする。

―――休憩―――

司会

これまで未来共創チーム会議を３回実施する中で出てきた１８個のキーワードをホワイトボードに貼り出している。ここからは論点を絞り込みたいので、これらのキーワードの中から３～５つ程度、このチームとしての強い問題意識は何かについて議論していきたい。

事務局で作成したフォーマットに落とし込む方法で進める。タイトルを付け直しても構わないが、これまで出てきたキーワードを土台に新たなタイトルを付けていただきたい。例えば、２つのキーワードを組み合わせて、別のタイトルをつけても良いし、１つに絞って、いろいろな意味をつけていく方法もあるかと思うが、議論を収束に向かわせたい。そのためには深く、個別性の伴う議論が必要なので、２グループに分かれたいと思う。

杉田委員

分かれて同じ話をするということか。

司会

分かれて同じ話をして、後で統合する。両者で意見が異なる部分が大事だと思うので、異なる部分は無理に一緒にはしないということで、個別性は残しておきたい。

伊住委員

全員で議論しても良いと思ったが、その場合、導かれ過ぎてしまうのだろうか。

司会

導かないつもりだが、ある程度収束に向かわせるという共通認識は持っておきたい。

仲田委員

先ほど出ていた、まとめ過ぎないかというところだろう。

池坊委員

まとめたい気持ちは分かるものの、私たちもこのキーワードに対して異論はないが、それらの説明をすることがこのテキストの目的ではないという議論をこれまでしてきたと理解している。

このテキストで最も重要なのは、参考資料の（2)「委員の主な意見」に表れるそれぞれのストーリーである。それが問いの形なのか何か分からないが、そこで何かを投げかけて、審議会委員や起草者の野村特別委員の頭の中で、「なぜこういった問いをしたのだろう」、「この問いをしたのはどのような人なのだろう」という脳内の行動変容というか、行動を起こさせるためにも（2）が非常に重要であると思っている。

（1）は、本当に結論を書くべきところなのか。説明的にこういった問題意識があり、それで皆がこのような問いを出したということであり、もし１８個の中から３～５つ選んで、それを適当なテキストにまとめると、(1）と（2）に書いていることは一緒もしくは、少し劣化したものになるとも思ったが、皆さんの率直な気持ちとしてはいかがか。

安野委員

私は、まず問いにするか、結論まで書くかという点が１つのポイントかと思う。２点目が、この（1）と（2）をどのくらいのボリュームで書くべきかである。１点目については、結論と問いの両方が混在していても良いと考える。結論として言えるものがあれば書けば良いし、見解は異なるが、問いとして重要であることに関しては概ね一致しているものがあれば、問いを投げかけて、「この考えとこの考えがあり、われわれの中でも結論が出ていない」と書けば良い。

２点目については、(2）の個別の体験から来るテキストは重要であるという池坊委員の意

見に賛成しつつも、読み手の読む時間の問題も現実的な制約としてあると思うので、(1) に分かりやすく書くことも一定大事なのではないだろうか。

杉田委員

参考資料のフォーマット１枚にまとめて、審議会に提出するのか。

司会

数枚の想定である。大切にしたいこと１つにつき１枚が目安である。全てをこの場で埋める必要はないので、ポイントさえ挙げてもらえれば、事務局で案を作成することも可能である。そして、テキストだけで伝えるのではなく、審議会委員と対話する場を設けて、直接伝えるという方法も考えられる。

この中に問いを含めても良いというのが安野委員の意見で、テキストは作りつつ、これを見た時に自分が大切にしたい問いはこういったことだというものを、個人の経験や背景と併せて審議会委員と話をしていく方法もある。

大竹委員

対話する場というのは、共創チーム会議や審議会とは別に設けるということか。

司会

そのとおりである。調整の結果、全員が集まることは難しいかもしれないが、それを記録に残すことも重要であるという意見があったので、記録に残すことで対応したい。

杉田委員

意見も言いつつ、その内容をまとめ、そして伝えるためのアウトプットも考えなければいけないということは、審議会と起草者の役割を全て担わなければいけないようで非常に難しい。

大竹委員

とりあえず進みながら考えても良いのではないか。

安野委員

中身の話をする時間を多く取りたい。

司会

それでは、２つに分かれて進めようと思う。

各テーブルの議事録は別紙１

―――グループ討議了―――

司会

それでは、各グループでどういった議論が行われたのかを共有し、現時点での暫定解ということで構わないので、まとめていきたいと思う。

安野委員

私がいたグループでは、大きく３点話した。１点目は、骨子案やそれに対する審議会の意見を見ながら、ギャップはどこにあるのかという話になり、１つは、そもそも意識の高い人向けの話し方になっているという意見が出た。他には、いろいろな人がいろいろな考えを持っているという前提の中でこういった話があるという、その前提の部分が抜けてしまっていないだろうかということで、分かりやすく、きちんと伝わるものにしなければいけないという話と、そういった矛盾を抱えた中でもまとまっている話だという文章があった方が良いのではないかという意見が出た。

２点目は、超長期目線ということについて、あまり触れられていなかったのではないかという点である。長めの時間軸を持っているという話は書かれていたが、それがどれくらい長いと良いのか、そもそも長期目線を持っていることが良いことなのか、悪いことなのかという話は、そこまで議論がなかったように思う。我々のグループの中でも、超長期ということが果たして本当に良いのか、京都市の人もそのような長期目線を持っているのか、持っていないのかという話をした。

３点目として、15 番の「無計画をデザインする」である。これについても審議会の意見からは読み取れなかったと思っており、未来共創チームにはあるが、審議会には無い視点なのかもしれないという話をしていた。

大竹委員

「無計画をデザインする」という話と、前提が抜けているという共通点として、長期ビジョンが網羅的であるという思想が現代風ではないことを強調したい。長期ビジョンが網羅的で、全員にとって素晴らしいものを目指すことには限界があるという前提に立つことが必要である。これは骨子案にはない視点である。「無計画をデザインする」ことに近いかもしれないが、もっと偶発的に起こることに対する思いを盛り込みたいと考える。

池坊委員

審議会の議論はやはりＱ＆Ａで問題解決型の議論になっていると感じる。この骨子案の構成を見ても、１人の個人があるべき理想に向かって進んでいく単線的な描き方である。それがいろいろなひずみを生んでいるのではないかと考え、そこにも一定の限界があり、長期ビジョンとしてこのような形になった。その矛盾もしっかり書き込み、あるいはきちんと応対していかないと誠実ではない。そこに代表性や文字の限界性という問題もあるが、１つの解があるのではなく、共感していく価値を求めていく複線的な方向で京都の未来を描いていく

など、そういった価値観を盛り込んだ方が良いという話にもなった。
その関わりで、わたくしや自治など、いろいろな自分を持っている集団が多元的に、その時々でせめぎ合ったり、アメーバのように伸びていったり、縮み合ったりしながら、京都というまちができていったというところだろうか。

仲田委員
超長期的な目線で見ることが大切である、しかし、それが正しいかどうかということは分からないという両方の捉え方がある。他にも、無計画をデザインするのが良いという意見と、無計画だと困るという意見が出たので、何か矛盾した問いを投げると面白そうだと思った。

杉田委員
そういった問いがそれぞれにひも付いて出てくると良いと思う。

仲田委員
テキストに落とし込む際に、このようなことを大切にしたいという中に、委員の主な意見として、矛盾する言葉が並ぶと面白い。

大竹委員
私たちが審議会に提示するものが、「結局何が言いたいのか」ということになっても構わない。それが分からないからこそ議論しているのであり、私たち自身もこれが正しいというものをつくることができるとは思っていない。このような私たちに代表性があるのかという話も度々出てくるが、意見や問いは出しつつ、バケツをひっくり返すこともありえてしまう何か余地を残しておきたいとも思う。

池坊委員
今までの会議でも毎回異論が出てきており、この異論が出てきていることが、未来共創チーム会議らしさであり、何回も粘ったが全然まとまらなかったということも、１つの答えではないだろうか。だから、全て提示するという形でも良いかもしれない。

仲田委員
それで良いという肯定の目線も長期ビジョンであり、京都が２５年先を描く長期ビジョンも余白なのではないか。

伊住委員
そこが余白になる。

大竹委員
行き来するからこそどれでも選べるし、市民一人一人の裁量で選んで良いのではないか。

長期目線を大事にしたい市民がいても良いし、そうでない市民がいても良い。

伊住委員

その振り幅をきちんと示しておいた方が良いということだろう。

都地委員

私のいたグループでは、長期で考えるにしても、目の前の問題を捉えてから考えるにしても、一番失ってはいけないところは、愛ではないかという議論になった。過去から今に至るまで、京都のまちは他者を尊重するといった愛を大切にしてきたと思う。

その軸を持った上で答えが見つからないことと、ただ自分のエゴを出すだけ出して、そのまま愛がない状態で課題を解決していくことでは、わけが違うので、愛を軸にする必要がある。人本来のつながりやぬくもりを忘れずに、愛のあるまちを全市民で目指し続けていく、追求していくことが非常に重要ではないかと思っている。

伊住委員

愛情というキーワードが最後に浮かび上がってきたのは、とても良いと思いながら聞いていた。私は同じグループで、最初にこの議論をとりあえず置いて、パーソナルなコメントをさせてもらった。

私は２歳と０歳の子どもと一緒に住んでおり、京都市の取組で、小学校以上は伝統文化や京都の文化に触れる機会が充実しているが、小学生未満を対象とした取組がほとんどない。伝統文化側も幼児教育側もどうすべきか分からず、空白になりがちである。小学校に上がってから京都という文化に触れても、別の国の文化のように感じる子も一定数いるだろう。そういった部分が京都市の施策に抜けているのではないかという自分自身の思いから話した。

京都というまちの中に、子どもたちを受け入れる前提で成立している場所がファミリーレストランなどに限られているので、そのような空間が様々な領域に必要であると思う。抽象度が高いが、まち全体の中で、愛情を受けたものを返すという循環が必要ではないだろうか。

三川委員

私は伊住委員の話を受けて、東京と京都の人のつながりの違いについて話した。東京では、食事に誘われる時、肩書きや目的が明確化された状態で誘われたり、紹介されたりする。私の肩書きや役割がこうだから、きっとこの人とつながると良いということで紹介してくれるのだと思うが、京都ではそういったつながりがないことに驚いた。

一方で、よくあったのが、知人から、「今度、１人連れて行くから食事に行こう」と言われるだけで、その人がどのような人なのかについて一切情報を言わない。当日にその人の紹介をしてもらうが、そこには全く目的や利害関係などを求めていないというのが、非常に面白い。

先ほどの愛の話で言うと、無償の愛に近いかと思う。ただ単純に紹介したかっただけで、その場で何か起きなくても良いから、結果的に仕事でも仕事以外でも関わることになるかも

しれないが、その時は別に何かを生もうと思ってつなげたわけではないという世界観があるのは、とても京都らしいと思う。

これは、資料５の２番「市民が醸す強い信頼感と責任感」に近しい気がする。信頼関係が根付いているからこそであり、この人に紹介するのであれば大丈夫だろうという、愛にもつながる部分であると思う。

都地委員

確かに、未来共創というのは、市民全体で未来をつくっていくことだと思うが、互いに愛を渡していく文化だからこそ、その一体化につながっていくのではないか。そして、京都ブランドが生まれて、根付いていくのかと思う。

田口委員

人を紹介することについて、信頼関係や責任感もそうだが、資料５の１０番「消費型ではないまちづくり」も関係していると思う。京都の場合は、交換がより複雑であるという捉え方ができる。肩書きで紹介して、そこで仕事が生まれるのも当然良いが、やはり直接的過ぎてしんどさがあったりする時に、ワンクッション、ツークッション挟まっているというか、長い目で見て、返ってくるかもしれないというような、それは自分ではなく、例えば自分の子どもだったりするような、愛情や利害のようなものがうまく線を引けるとも限らないので、そのようなグラデーションの見方もできるのではないかと、聞いていて思った。

司会

２つのグループで共通していたのは、前提として我々に代表性があるわけではなく、こぼれている議論があるかもしれないということかと思う。

こちらのチームでは、生態系全体で価値を捉え直すというのは、拾い切れていない意見も、もっと広く捉えるべきなのではないか、私たちが見えていない、人や自然以外の意見もしっかり拾い上げていくべきだという話がされており、そのあたりは、共通点があると思った。

大竹委員

私は、全員がメタ的であると思った。時間軸の短い結果ではなく、周囲の、巡り巡った先まで思いを馳せているから利害関係ではないつながりが生まれる。例えば、すぐ返ってくるようなものではなく、巡り巡って、今の自分には返ってこなくても、まち全体として良い働きが起きるのではないかなど、うまくいっても、いかなくても構わないという感じや、自分に直接的に何かがなかったとしても、多分どこかで、何かのきっかけになっているのではないかと思うから、明確な目的のない食事に誘うことも、短期決戦で何かをするというより、つながりが生まれると良いし、別にならなくても良いというような縁起的なものがあるのではないだろうか。

伊住委員
　確かに、縁起的という言葉は良いと思う。目的の話にもつながる。

大竹委員
　目的ベースでの出会いは、その目的を達成することしかないが、目的のない出会いは、いろいろなことが起こる可能性がある。

伊住委員
　三川委員の話にもあったように、目的があって会うと、その目的を達成することが最終ゴールになるので、分かりやすい立て付けではあるが、出会う入り口が肩書きを外した入り口であると、それ以外の部分に可能性が大きく広がっていくようで、そのような関係性の在り方は、確かにとても京都らしいと思う。

都地委員
　何者かでいなくてはいけないと強要するわけではないから心地良いのだと思う。

三川委員
　それが良いとは思いつつ、ただ今回はキーワードを抽出する作業ということを踏まえると、今のままでは、あくまでも京都の性質を表しているに過ぎず、市民が行動したくなるようなものではないと思っている。もう一歩踏み込んで、私たちがつくる言葉を見て、市民や審議会委員が心を動かされるようなものにしたい。

都地委員
　先ほどのウェブの話ではないが、例えば課題の提案などをする時に、誰に向けてのサポートなのか、誰に向けての愛なのかという矢印が見えると良い。

仲田委員
　行動を期待している人に対してということか。

都地委員
　そのとおりである。例えば、ここにバスの路線を追加してほしいというのは、誰に向けてなのかというと、このエリアは最近、高齢者の方が多いので、移動手段を増やしてあげたいなど、いろいろな人が提案していく中で、そういった矢印の向きが見えると良いのではないか。

池坊委員
　愛は身近なところに常に向いているのではないか。先ほどの大竹委員の超長期目線に対する違和感などの話が重層的になっている感じもあるが、いろいろなものを受け継ぐ時も、前

の人から大切にしているものを受け取って、未来などではなく、息子や娘あるいは関係する人に良い形で渡したいと思う。それが信頼かもしれないし、愛かもしれない。
　見返りを求めずに京都の人が付き合っているというのを聞いて、本当にそうなのかと思うところもあった。しかし、身近な人の愛が循環しているというのは分かる気もする。

仲田委員
　そこに、大切にしたい「らしさ」の定義を入れたかったのではないか。面で捉えて、ようやく出てきたこの京都という主語は何かという、まだ見えないが見え始めているような感じがする。

杉田委員
　安野委員は東京でもこのようなビジョン策定の会議に参加されているとおっしゃっていたが、スキームなど学びになるようなことがあれば聞かせてほしい。

安野委員
　私の理解では、東京はこの会議の前段の部分をやっている。そもそも東京都民の人たちは、未来の東京にどうなってほしいと思っているかというデータをひたすら集め、それを基にこのような考えがあるのではないかということをまとめている状況である。
　その時に、こういったキーワードではないが、同じようなことを言っている意見のまとまりがいくつあるのか数えている。その中で、例えば東京では、満員電車など交通がもっと便利になると良いという話や、子育てしやすいまち、災害に強いまちが良いというような意見のまとまりが９０個から１００個程度出てきて、それを基に有識者会議において議論し、ビジョンとして１つにまとめていくという流れである。

杉田委員
　バス路線など具体的な言葉が９０個程度並ぶのか。

安野委員
　そのとおりである。バス路線や自動運転など粒度は様々で、良し悪しはあるが京都市とは全く異なる。いろいろな方が意見を出してくださっているので、議論の素材として使いやすい。長文のものから、１ツイート分程度のものまで様々で、合計１万から２万個程ある。

大竹委員
　これまで「京都」という主語で考えてきたが、自分の中ではこれ以上意見が出てこないと思うので、個人的な話をしたいと思う。
　個人的には、何度も言ってきているが、私たちの市民としての代表性には限りがあるため、意見を取り切れる、切れない云々より、そもそも取り切ることが無理だと思っている。また、みんなにとって良いものは果たして存在するのかという問いもある。市民と対話すればそれ

が分かるのか、市民の意見を拾えたことになるのかというと、そうだとは言えない。すべての意見を網羅することは不可能である。そもそも、良いと感じる物事は各個人がそれぞれの感性に基づいて決めて良いのではないか。それぞれにとって良いものが重なった先に、京都というまちがあるとよい。

安野委員

それは私も同意で、すべての意見を取り切れないという前提で、我々ができる最大限の貢献というか、伝えられるメッセージは何かという議論をもう少しできると良いのではないか。三川委員が話していたように、もう一段、二段ほど、キーワードとして強さがあると良いと思う。

池坊委員

私は、逆に全ての矛盾を描いた方が、エッジが立っていると思う。このビジョン自体の限界性もそうだし、愛の定義や愛の広げ方についても、京都全域に愛を広げるべきだという考えや、身近な人の中で愛が循環して、つながっていけば良いという考えなど様々である。愛の話、わたくしの話、あるいは他の焦点においても、様々な意見が対立していること自体を描いても良いのではないか。１つの未来や、１つの愛を描けないと思う。

伊住委員

最初に池坊委員が、参考資料の（2)「委員の主な意見」が重要ではないかと話していたことにつながる。未来を考え、良くするためにすべきことは、今ある声をきちんと拾って、何ができるかという話だと思っている。結局、現状は過去と今しかないので、今何をするかということが２５年先にもつながっていく。

だから、一市民である自分自身の声を取りあえず聞いてほしいというスタンスでも良いと思う。委員それぞれに、一番伝えたい何かがあるはず。私であれば、先ほど言ったような、子どもたちを受け入れる環境が少ないという状況があり、京都市の中にもっと増えてほしいという声を伝えれば、長期ビジョンの中に何かしらの形で盛り込まれるかもしれない。

私たち以外の京都に関係する人たちの声を拾うことも重要であり、この議論に参加している私たちがきちんとパーソナルなメッセージを届けることも重要である。結果的にどちらもおろそかにはできないので、きちんと声を拾えているかという問いに対して、私たちは一人一人こう思っているということを伝えるということでも良いのではないか。

仮に抜け落ちていることがあれば、確かにそうだとなるし、それに対して、私たちの声しか拾えていないという話になると、先ほど言ったウィキトピアのような提案もあり得る。いろいろ試作段階だが、何かできることがあるのではないかという話もいただいているので、そういった仕組みも機能するのではないかという提案ができるかもしれない。

声が拾えていないことに対して共通する問題意識があると思うので、それを切り口にして、もう少し掘り下げても良いのではないか。

田口委員

今はワーディングで詰まっているという理解をしているので、アルコホーリクス・アノニマスというアルコール依存症の人たちの団体の１２ステップという宣言を紹介したい。「私たちはアルコールに対し無力であり、思いどおり生きていけなくなっていたことを認めた」から始まり、「自分たちの理解した神に配慮を委ねることにした」などという言葉の羅列がある。例えば、こういう形式でも良いのではないかという一例である。

抽象度が高い話と現実的な日常の話があり、それらを結ぶには、非常に宗教じみたことが必要になってくるかもしれないと思い紹介した。

池坊委員

愛や、京都のパーソナルな結界、あるいはわたくしの存在など、これまでででてきたトピックが大切であるということに関しては合意が取れる。しかし、その具体的な解釈に関しては合意が取れないと思っており、合意が取れないことを書いた方がまとまるのではないか。

合意が取れないことをぼかすのではなく、きちんと書くことに未来共創チーム会議としての意味があるのではないか。

安野委員

私は半分賛成で、半分異論もある。合意が取れないものを両論併記して書くことは大賛成であり、(2)「委員の主な意見」が大事であるのは全く同意するが、未来共創チーム会議として一番意味があるのは、審議会に足りない視点のようなものを補うことかと思うので、そういったものを提示するのが良いと思う。

司会

強いて言うと、提示すべき論点は何かあるか。

安野委員

資料６を見ていても、無計画をデザインするというところは、あまり議論がされていない印象である。無計画をデザインすることの是非は、この中でも意見が割れているかもしれないが、審議会委員がどう思うのかを聞いてみたい。

あとは、超長期目線とメタメッセージとしての全員が合意することはできないという感覚を審議会に提示すると良いのではないか。

伊住委員

私たちが提示しなくても、既に審議会において議論されている話題も相当程度あると思うので、漏れているものは何かということを整理したうえで話していくのは良い。

司会

それでは次の議題に入る前に、未来共創チーム会議として審議会に提示する内容として、

安野委員の意見に合意できるか問いたい。

杉田委員

審議会でまだ話されていないことを提示することには賛成である。そのためにこのチームが存在していると思っているが、審議会で何が話し合われているのかを見てからでないと、話し合われていない論点がこの３つなのか、他の視点があるのか判断できないのではないか。

仲田委員

同感である。

池坊委員

せっかく２グループに分かれて議論する中で、何となく各グループの焦点が見えてきたと思う。例えば、向こうのグループであれば限界性や多元的な一人一人の性があるというところで、こちらのグループであれば愛など、そういったものに集約していく方が良いのではないか。その部分が最終的に、本当に知りたいところかと思う。

安野委員

「無計画をデザインする」「超長期目線」「矛盾と余白」の３つの中にそういった話が入ってくるのかと理解している。

池坊委員

私も組み込んでも良いと思う。

安野委員

各グループで話し合って見えてきたものを伝えないということではない。

（２）第３回京都市総合計画審議会の結果報告及び長期ビジョン（仮称）骨子（案）について

○　事務局から「京都市長期ビジョン（仮称）骨子案」について説明

田口委員

私も審議会で議論されていない３つのポイントは重要だと思っている。骨子案を見て思ったことは、審議会委員の意見で出たケアなどの骨子に足りない視点は、我々からも出てきそうであるということが１つ。

もう１点が、京都らしい考え方という話をしている割には、全体のフレームが非常に西洋的な立て付けであるという印象を受けた。世界文化自由都市宣言との１対１の対応関係や、あるいは物事の因果の捉え方が西洋的であり、テキストの限界という話と結び付く。テキス

トにまとめる以上、避けがたいことだと思うので、我々が審議会とは別の集団として、自覚的であろうとすることが重要。宣言という形のものをテキストにして、京都らしさを訴えること自体の矛盾性を、メタなメッセージとして伝えることは必要である。それが、伝え方の万葉集的なテキストや対話の時に表現されるべきことかと思った。

大竹委員

骨子案の前段に、「世界における京都市の役割を意識した構成」と書いてあるが、私たちはそこまで世界における京都市の役割について議論していなかったので違和感を覚えた。

また、「世界の現状の正しい認識の上での」という部分に対して、このような表現が出てくる根底には「そもそも正しい認識ができる」という価値観があると思うので、認識できないものもあるという、私たちのこれまでの議論とは異なっている。

安野委員

私からは３点で、１点目がフォーマットの話、２点目は審議会には無かった視点で、我々が持っているのではないかという話。３点目が、細かい突っ込みのような話である。

１点目については、テキストの限界のようなことに触れられているが、これは最初の方の議論にあった話で、テキストでも取り残される人はいるし、データでも取り残される人はいるだろうということも踏まえると、まず分かりやすいテキスト版のようなものがあっても良いかもしれない。あるいは、動画で分かりやすくするようなものがあっても良いかもしれないので、２５年前と異なり、単一のテキストだけではなく、いろいろなメディアをミックスした方が現代に合っており、良いのではないか。

フォーマット面に関して、もう１つは、先ほども申し上げた話の延長線上だが、単一の宣言から改定していく運用の方が良いと思っており、今は時代の変化が早いので、地図を作るよりも、コンパスを持った方が良い。

次に２点目の審議会に無かった視点に関しては、０．１市民のような考え方が我々の議論ではあったと思うが、あまり骨子案には見られない。京都市に住んでいる人を前提とした文章かと思うので、そのような概念を入れても良いのではないか。

審議会に無い視点の２つ目は、第４章第３節に、人間が本来的に生身の関係において存立しているという話があるが、未来共創チーム会議の中でもあったかもしれないが、京都は人も自然も機械も幽霊も混然一体とした雰囲気がある中で、どこまでそれを言うべきか、あくまでも人間と自然だというようにするのかは、議論があると思う。

審議会に無い視点の３つ目としては、我々の中でも出ていない話かもしれないが、市民側のコミットメントをどこまで求めるのかということである。つまり、宣言も様々あり、住んでいる人もこれに向かって頑張っていくのだという宣言もあれば、そうでもない宣言もある。どこまで市民側の頑張りを求めていくのかというようなことは、重要な論点ではないか。個人それぞれに向かう方向があるというのであれば、協力の要請は控えめになるが、京都市の考え方が大事で、みんなにも協力してほしいという立場に立つこともできる。

３点目の細かい突っ込みで言うと、デジタル化の進展のような話は、短期間のうちに賞味

期限が切れてしまう文章にならないか懸念しており、ＡＩにできることが広がっているという意味では、２０２４年に２５か年計画を作るのはタイミングが悪い。３か月後くらいに、前提条件が変わる可能性があるからである。仕方ないことだが、１点目のフォーマット面も併せて、賞味期限が切れたら、みんなでアップデートできるような仕組みを埋め込んでいた方が良いのではないか。

大竹委員

地図よりコンパスをという話について、もう少し具体的に教えていただけないか。

安野委員

例えば、Ａ地点からＢ地点に行こうという時に、地図を持ち、この角をこう曲がって、こうやって行こうという計画を立てるのか、何となく方位磁針だけを持って、大体こちらの方向に行けば、少しずつ軌道修正しながらたどり着けるというやり方か、どちらが良いのだろうかという話である。そもそも今は、地図を描けないのではないかという話なので、何となくの目安を見ながら、少しずつ軌道修正していくやり方のほうが合っているのではないかという意味である。

杉田委員

私からは４点ある。３点が内容に関すること、４点目がフォーマット全体に関わることである。

１点目は、市民権についてである。市民権が０．１あるという話は、私自身も審議会において発言したが、骨子にあまり出てきていない。第４章第４節の「京都市民のこれから」という部分について、そもそも京都市民は誰を指すのかという議論が、私たちの中で出てきたことは、非常に大切なことだったと思っている。例えば３日間京都にいたら、京都市民０．０１になれてしまうという考え方は、このメンバーだからこそ出せた世界観である。そういった意味では、こちらでは、つながりのデザインというところにまとめられているが、市民権のこれからや、市民の在り方、シチズンシップの在り方は、ポリティカルなディスカッションかと思う。

そこにもつながるが、２点目のポイントとして、無計画のデザインのところで、ボトムアップでつくられていく都市が京都らしいという話になると思うが、そのような意味では、市民の巻き込み方や、ボトムアップのエネルギーの巻き込み方、包容力という話も、もう少し含めたいと思う。安野委員が話していた市民側のコミットメントをどうつくっていくのかというところにもつながる。

３点目が、超長期目線にもつながると思うが、２０５０年にこれを見返していた時に、全然違うところがあるかもしれないというのは、この時代だからこそではないか。１００年前もそうだったかもしれないが、時代は大きく変わる。時間軸をどう捉えて、今これを作っているのかというような前提条件も含められると良いのではないか。

４点目は、フォーマットに関する話で、審議会においても、もう少し分かりやすい言葉の

方が良いのではないかということは挙がっていたので、テキストの限界については、そのとおりだと思う。何かこのチームらしく出せるアイデアとして、これも安野委員が話していたようなマルチメディア的な考え方や、レポジトリ的、アイデアバンク的に、これをベースにしつつ、例えば継ぎ足していったり、改編を加えていったりというような考え方があるのではないか。

最後に、ピーター・ズントーという建築家の設計図を紹介したい。庭的な、有機的な１枚の絵になっている。一般的には、細かく線を引いて、ここに何があって、数値があってという、いわゆるテキスト的な設計図だが、これはどちらかというと、ビジョンが理路整然とまとめられずに、弁当箱に詰められたような全体図の描き方をしている。これもマルチメディアの話になるかと思うが、こういった世界観の把握の仕方もこの世代らしいと思った。

三川委員

これまで出た意見とも重なるが、私もこのビジョンが文章化されたもののライトバージョンが必要かと思った。この長期ビジョンを読解して、自分事にするのは非常に困難だと思うので、もう少し小学生にも分かるようなライトバージョンのガイドラインが必要ではないかというフォーマットに関する意見である。

あとは、主語の定義を明確に書くべきであると思う。このビジョンに関わる人は誰なのかというところは、きちんと明記しておいた方が、より自分事化しやすい。

内容の話については、人との関わりの捉え方にギャップがあると思っている。例えば、第４章第３節にある「人間が本来的に生身の関係において」という話や、３行目辺りの、「伝統的な行事などに基づく共同体を保全していくとともに」というように、人との関わりに関する言及が非常に限定されているという印象を受けた。

一方で、私たちの議論では、資料５の９番、１０番、１４番にあるように、鴨川に面白い人がいて、その人たちがその場にいるだけで、何かモーメントが起きるということさえ、人との関わりとして捉えているので、もう少し幅を持たせたいし、観光客を京都市民として認めたいという思いがある。そこの幅を持たせるような記載にしてはどうか。

やはり、この文章だけではなかなか自分事化できない。私ですら、今の文章は、京都の高尚な人に向けての内容に聞こえてしまい、私に関係ないのではないかと構えてしまった。もっとライトに、メディアを複数用いながら、あなたも関係する、あなたに向けて届けたいということをより意識的に行わないと、せっかく文章化されたものが活きないと感じた。この部分は、共創チームだからこそ訴えかけられるところなので、もっと積極的に伝えていきたい。

大竹委員

言葉の概念をもう少し整理する必要があると感じた点がある。例えば、「自然」という言葉について、我々の議論では、山や川や湖などのマクロな視点から苔などのミクロな視点、さらに目視できない菌やウイルスほどの視点にまで、多様なレイヤーや粒度で自然を捉えていた。しかし、骨子に出てくる「自然」は、山や川や湖など壮大で、認知できるもののみを

指しているように感じた。人間は自然の一部であるという表現もあったが、その自然観がどこを指しているのかを整理する必要があるのではないか。

また、「文化」という言葉に関しても同様である。文化は祭りごとのような一部の華やかなものだけを指しているのか、それともももっと広範な意味、例えばその地域に根差した共通の価値観や思想などまでを指しているのかなど、何を指しているのかが不明瞭である。あえて抽象的にしている意図があるのかもしれないが、なぜその言葉を用いているのかや、指し示している対象が分かると、より深い理解につながると感じる。

伊住委員

これはビジョンの中で、今後第４章に集約されていくという考え方だろう。だから、第３章の京都市の現状分析に関して、今後しなければいけないが、この中では抜け落ちているポイントがあると思っていることが２つある。

１つは、先ほどから言っている小学校未満の子どもたちに関して、教育研究の取組で推進していただいた部分で、小中高での伝統文化体験はあるが、小学生未満の子どもたちのものがない。それは恐らく、昔は家庭でそういったことを教育していたし、地域でやっていたが、そういった部分が現状ほとんどなくなってきているということかと思う。だから、小学生未満の子どもたちに向けた取組も、入れていかないと取りこぼすのではないか。それを今後必要なこととして第４章の中に盛り込んでいただければ、これまでできていなかった部分を補えるのではないかと考える。

もう１つが、第３章第２節の「文化都市としての取組」の「伝統文化、史跡の保全」という部分についてである。これも、私は何度か言ってきたが、保全だけではなく活用の視点が重要である。建築や文化財の周辺を取り巻く生活文化としての、茶室にはお茶の文化があるように、ソフトがあるから建物も機能している。これは記載内容のイメージから抜き出しているので、もしかしたら書いてあるのかもしれないが、保全だけではない活用の視点がこれから絶対に必要になってくるので、ぜひ記載していただきたい。

杉田委員

子どもやケアに対する視点に関しては、審議会においても、欠けているという素晴らしいコメントがあった。だからこそ、このチームにおいて、その視点が出てきたということも大切である。加えて、それをサポートできるような議論をしていきたいと思った。

伊住委員

同感である。伝統文化側がこのようなことをしているといった具体的な事例の紹介ができるので、もう少し踏み込んだ話の中で、たたき台のようなものが必要であれば、お示しすることもできる。反対に審議会の方々から我々に対し、「こういった議論をもう少し深めたいと思うが、何か事例はあるか」という問いかけがあっても良いかと思う。

一方的にこちら側から示すこと以上に、何か疑問に思っていることをこちらに投げかけてもらえるような関係の方が有意義である。そのインタラクティブな関係性が、審議会と未来

共創チーム会議の中にあれば良いのではないか。

杉田委員

伊住委員のおっしゃった保全だけではない活用の視点ということも、このチームだからこそ出せる考え方であると思っており、このチームでの議論において、ベストではなくベターというキーワードも出てきたと思う。例えば、町家の保存のような分かりやすい例を挙げると、完璧なものを１つだけ１００％の状態で残して、その隣がコンビニという世界観ではなく、みんなが使えて、何となくベターで、そうすることで他にもその数を増やしていけたり、実際に使える人が増えたりする方が良い。先ほど畳で過ごしている人たちが周りにいなくて、衝撃を受けたという話が印象的だったが、そういったものがどんどん改善されるかもしれない。

ただ、保全に対する考え方は、ジェネレーションギャップもあると思っているので、深掘りして意見を提示できると良いのではないか。

伊住委員

日本文化の根幹は座敷や畳から出来上がってきている。畳もメンテナンスしなければならず、それを取り入れること自体に文化を取り入れようという気持ちがあるわけなので、その気持ちに応える何かしらのサポートが多少なりともあると、ベターなものが残っていくと思う。

大井委員

人口減少という点について、審議会でも挙がったということだが、子育ての機会の場が何もないと思っている。機会や場に関する意見は、これまでも出てきたと思うが、こういったところは欠けていると思った。

フォーマットについても、自分が見ただけでも構えてしまう内容を市民に届ける時に、今日の議論であったような、くだらなさも京都らしさを備えたものとして、三川委員が話していたようなまとめがあっても面白いのではないかと思った。

杉田委員

人口減少に関しては、確かにそのとおりだと思って聞いていた。その関連でいくと、忘れてしまっていたが、脱成長というキーワードが私たちの議論の中で何度か出てきたと思うが、この世代らしい、差し迫った考え方だと思う。脱というか、別に成長しなくても良いではないかという考え方は、人口減少の時代に、生む、増やすという時代ではなく、より豊かに一人一人が暮らすためには何が必要なのかという視点も盛り込むべきではないか。

ただ、最近、私自身の生活の中で思うのは、数の話ではなくディストリビューションの話ということである。人口減少や少子高齢化と日本が言われるのは不安だが、世界的に見ると、日本の人口は他国に比べても多い。それなのに、私たちからするとかなり減って、どうしようという焦りを植え付けられているが、実はそうでもない。一旦焦らずに、では何が必要な

のかと考えた時に、もしかすると、今、都心に集中している一方、地方では過疎化しているような、「数ではなくてディストリビューションの話が大切だよね」という議論は、この世代だからこそ推していくべき考え方かと思う。

池坊委員

第４章にある「畏敬と感謝を抱けるまち」、「恢復（かいふく）できるまち」、「尊重し合えるまち」というのは、こんなまちはすごいだろう、こうなりたいだろうということを強く感じる。そうではなく、いろいろな未来が重なっていくものもあり、中身やワーディングよりも、もう少し粒感が出ると面白いのではないか。

壁紙を近くで見るといろいろなテクスチャーがあるように、描き方や言い回しも、もう少し粒立っているほうが伝わるのかもしれない。「抱く」にしても、畏敬というか、尊敬と感謝を抱いていくまち、尊重していきたいということかと思う。

安野委員

粒立つということは、もう少し具体的にということか。

池坊委員

例えば、「現代に生きる私たちが、歴史に生かされながら、日々新たな未来に生きているということの意義と幸運をかみしめながら」などである。

先ほどの超長期目線に対する議論が全くまとまらなかったことと重なるが、長期目線が良いという人も、それは違うのではないかという人も、この言い方では共感を得られないように感じる。一人一人に寄り添って語っている感じがない。

大竹委員

「コンパス」ということであれば、ルートや道筋を示すのではなく、方向性を提示するものである認識した。第４章の「京都市のこれから」から、西洋的な価値観や崇高な文書といった印象を感じた。これまで大切にされてきたものが、今後も大切にされるかどうかは分からない。

また、審議会は課題ベースで話されている印象を受けた。課題があって、それを解決するための議論というような、成長や拡大的な価値観ベースであると感じた。対して若い世代は、わざわざ課題を取り立てて、解決に必死にならなくても、自分の心地よいところでゆらりと楽しんで生きていける、そうしたい感覚を持っていると思う。そのため、この骨子を読むと、あまりに正しくてきれいすぎる印象を受けた。

田口委員

私は、第４章第３節の「地域社会のみならず国際社会の一員として」という記載に対して、本当にそうなのかと考えた方が良いのではないかと思う。同じことかもしれないが、きちんと地域社会の一員として生きることが、結果的に国際社会に貢献することはあると思うが、

社会の問題を解決するために、地域社会をつくろうというように見えなくもない。その関係をどう捉えるかということが転換点のように思う。

大竹委員

優等生のような文章である。

伊住委員

ある種全体主義のような感じがあるのかもしれない。

都地委員

世界文化自由都市宣言があるが故に、そもそも「世界史への貢献」が軸になっており、相対的に京都を見る時に、世界の理論が非常に強くなっているのかと思う。世界全体を相対的に見て、京都の未来をつくるのか、それとも京都の現状を見て、それを課題として捉えていくのかによって、内容も変わる。そのような意味では、世界文化自由都市宣言に引っ張られ過ぎている気がする。

田口委員

私は、世界文化自由都市宣言は許容度が高いような気がしている。うまく再解釈できるのではないかという気もする。

大竹委員

しかし、世界文化自由都市宣言は、京都が世界中から憧れられる模範生になることではないと思う。その部分が少しミスマッチな気がする。そうではなく、京都が変わったことをしてきた結果、世界のスタンダードではない道を進んでいるから、世界から大事にされるという構図だと思う。だから、模範的である必要はない。

杉田委員

まさに無計画をデザインするような、これまでこのチームの中で出てきた様々なキーワードをまとめて話していただいた。優等生ベースの考え方でも、正解ベースの考え方でもなく、よりボトムアップに、オーガニックに京都をつくっていった時に、どのようなものができるのか。

知り合いの例だが、ランドスケープデザイナーの方が、ある東京の公園に庭を造った際に、普通であれば建築家やランドスケープデザイナーは、ここを人間が歩いて、ここに花壇を造るという線を引くが、その方は、まず草を生い茂らせて、子どもを３人放った。そして、子どもが走ったパスウエーをそのままパスウェーにしたという考え方に近しいと思った。これは今的な、この世代的な考え方でもある。

田口委員

ブライアン・イーノという音楽家が、ストリートのデザインをどうするかという話をしていて、建築家のようではなく、庭師のように考えて、終わりではなくて始まりをデザインするというようなことを言っていた。建築家も、今どきはそう考えているかもしれないが。

図面を書いて、計画を立てて、それぞれ材料を決めて建てることが建築家であるとするならば、庭師は、そこにあるものの関係性の中で物事をつくっていく人だという言い方をしている。ランドスケープは、そのような考え方の人が多いというのを今思い出した。

司会

これまでの議論を踏まえ、草案に対して、この部分が足りていないのではないかという論点と、審議会委員に対して共有したい価値観はあるだろうか。

杉田委員

両者は大きく異なるものなのか。

司会

今回出てきた１０個ということで、まとめてしまっても良い。

杉田委員

これまでの議論の内容は、例えばグラフィックレコードでまとまっていたり、議事録で渡っていたり、審議会との合同会議でも議論をしたり、私から審議会に対して共有したりして、前提の部分は伝わった部分もあったかと思う。その上で、さらにきちんと私たちが言葉を尽くして伝えることは何かというところは、今話したことに近しいと思う。今までの話をまた総括して、まとめるのは違うと思っているが、みなさんはいかがか。

伊住委員

１つにまとめようとすると、どうしても普通というか、正しい何かになってしまうと思うので、１つ１つ、このようなことが抜けていたと伝える方が良いのではないか。審議会にとっても、その方が議論しやすいと思う。

例えば、それぞれの項目に、この委員は個人的にこういった経験を有していたから、このような意見を持っていたという事例紹介のようなものが重なると、より理解しやすくなるかもしれない。

杉田委員

先ほどの池坊委員の意見にも近しい。それに加えて、参考にした本などを書き込めるメモがあるとより伝わるのではないか。

安野委員
　私は、１つ１つを粒立てた上で、各々の意見を追記すると良いと思う。

大竹委員
　そこには、文字だけではなく、写真や動画で伝えても良い。

杉田委員
　各自意見を追記し、あまり長くなり過ぎると伝わらないと思うので、そこから必要な言葉をハイライトするという伝え方はどうか。

大竹委員
　例えば、杉田委員の意見に私がコメントを追加しても良いか。

杉田委員
　もちろん良いのではないか。

安野委員
　さらに広げるのであれば、編集途中の文書を公開し、誰でもコメントできるようにしても良いのではないか。

伊住委員
　我々委員だけのスペースと、委員も市民も加わるスペースの両方あっても良い。

司会
　それでは本日の議論をベースに、複数のテーマでまとめていくという方法で進めたい。

池坊委員
　主な意見や引用できる部分が、単なる引用に終わらない形に整理されると良い。実際に今挙がってきた１０項目の内実については、あまり議論できていない。
　それは多義的な解釈がある中で、様々な意見が載っていくのは面白いと思うが、整理されないまま載せるのではなく、その人自身が、本当にエッセンシャルに感じてコアな部分がしっかり伝わるような形になれば良いと思う。

仲田委員
　そういった意味では、京都市民の顔があまり見えない骨子というところに行き着くので、個人のエッセンシャルな、ピュアな部分を表現したい。

司会

最後に、西田都市経営戦略監に一言いただきたい。

西田都市経営戦略監

本日も長時間にわたり、このビジョンづくりに真剣に向き合って議論していただいたことに、京都市を代表して改めて感謝申し上げる。やはり、なかなか答えが出ないというのが正直なところかと思うが、我々も事務局として、どのような議論をしていただくのが良いか、模索しながら進めている。

今後、完成に向けて、様々な意見をもらう中で、誰にとっても１００点のビジョンにはできないことは、本日皆さんに議論していただいたとおりだとは思うが、策定過程において、どれだけ皆さんの魂を込められたかということが重要かと思っている。出来上がった長期ビジョンを、どのように市民の方に共感していただけるものにするかということについても、アイデアをいただきたい。

司会

これをもって、第４回京都市未来共創チーム会議を終了する。

（３）事務連絡

３　閉会